



どううら かつみ  
**堂浦 克美 教授**

～ 神経化学分野 ～

講義題目

**来し方を振り返る**

**～バブル期とその前後～**

**【略 歴】**

1985年 3月 三重大学医学部卒業	1996年11月 九州大学医学部附属脳神経病研究施設講師
1985年 6月 九州大学医学部附属病院研修医	2001年 6月 九州大学大学院医学研究院助教授
1991年 3月 九州大学大学院医学系研究科博士課程修了	2003年 7月 東北大学大学院医学系研究科教授
1991年 4月 日本学術振興会特別研究員	2019年 4月 東北大学大学院医学系研究科 医科学専攻長（併任 ～2023年3月）
1993年 4月 米国国立アレルギー・感染症研究所博士研究員	2023年 3月 退職
1994年 9月 三重大学医学部助手	

**【研究業績等の紹介】**

堂浦克美教授は、1985年に三重大学を卒業し、九州大学病院の研修医を経て、九州大学医学系研究科神経病理学分野(立石 潤教授)で家族性プリオン病の研究を行い、1991年に同研究科を修了されました。その後、日本学術振興会特別研究員、アメリカ国立アレルギー・感染症研究所 (Bruce Chesebro 博士の研究室)の博士研究員としてプリオン病の研究を続けられ、三重大学助手、九州大学講師・助教授を経て2003年に本研究科の教授に赴任されました。

わが国の狂牛病パニックは、アメリカ同時多発テロ事件が起こった2001年9月に始まりましたが、その時を境にプリオン病への関心が急速に高まり、プリオン病克服に向けて国は積極的に資金を投入しました。堂浦教授が東北大学に赴任されたのは、まさにプリオン病研究のバブル期の真っただ中でありました。様々な領域から新たな研究者や企業の参加があり、プリオンに興味を持つ学生や大学院生が次々と教室の扉をたたいた時期であります。その中で、研究代表者としてプリオン病の治療開発に関わる研究班を15年間にわたり組織し、大手企業との共同研究を進め、多くの関連研究班の分担研究者を兼務し、国の諮問機関の委員を務め、国内外の患者家族会のアドバイザーを担うなど、多岐にわたりプリオン病克服に向けて尽力されました。

堂浦教授は、特にプリオン病の治療開発において功績を残されました。キナクリンやペントサン

ポリ硫酸の効果を発見し、患者での臨床試験を主導して、プリオン病に対する治療開発研究の端緒を開かれました。特に、ペントサンポリ硫酸では英国の変異型ヤコブ病患者で驚異的といえる生存期間延長が観察され、治療開発の黎明期において患者で治療の可能性を示した点が大いに評価されました。また、アミロイド親和性化合物が診断薬や治療薬として有用であることを示し、優れたリード化合物の一つである comp B を発見されました。さらに、発病予防において驚異的な効果を発揮するセルロース誘導体を発見されましたが、そのワクチン様の曝露前予防効果は注目されており、現在も複数の海外研究グループとの共同研究が進んでいます。

一方で、社会における関心の低下とともに、プリオン病研究のバブル期も去り、今は狂牛病パニック以前の状況に戻っています。堂浦教授は、ご自身が経験された不思議な巡り合わせの中での「縁」に感謝するとともに、プリオン病治療開発で得られた知見が将来プリオン病や類縁疾患の克服に結びつくことを心から願っておられます。